

# ノンフィクション性体験レポート

Vol 3.

## 【被験者】

Name:千佳子さん

Job: 専業主婦

age:■1

体験内容：ショタな実息子との母子相姦

※無料サンプル版につき P.5 まで。

# 目次

表紙	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.1
目次	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.2
インタビューパート①	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.3
体験告白パート：息子の性への目覚め	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.4～P.5
インタビューパート②	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.6
体験告白パート：旦那の助言で実息子をいっぱい愛撫	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.7～P.14
インタビューパート③	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.15
体験告白パート：ママが童貞を奪ってあげる	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.16～P.19
インタビューパート④	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.20
体験告白パート：初めての射精。主人との行為を覗く息子	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.21～P.23
インタビューパート：エピローグ	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P.24

## インタビューパート①

母親×○学生

KKCで最初に発売した商品だ。

(サイトによって検閲に引っかかっているのでタイトルが違います)。

実はコレ母子相姦を実体験したお母さんの証言を聞いて妄想を膨らませたりなどして、私、Daishirou が書いた小説である。

書き終えた時はおっしゃ良いのが出来た！と思ったが、

そして、しばらくたってこう思い始めた。

——もしかしたら俺が色々主観で改変してしまうより、ありのままを伝えた方が面白くて良かったんじゃないか。

という分けで何故、自分の息子と近親相姦をしてしまい、その関係がどの様に継続したのかという

詳細な状況を改めて聞き直したいと考え再度のインタビューを申し込んだ。

**千佳子**：もう一度話せば良いんですか？

**Daishirou (以下：D)**：二度手間になってしまいました对不起。

以前お伺いした事をもっと詳細に聞きたいなあって思ってしまいました…

**千佳子**：私は別に大丈夫です。

この幸せをどこかで誰かに話したいって思い続けていましたから。

でも、そんな事したら破滅しますからね。

だから、ずっとモヤモヤしてたんです。再び機会を頂きありがとうございます。

**D**：以前お話を伺った時も聞きましたがご主人との仲は？

**千佳子**：以前と同じ事をお答えしますね(笑)。良好です。

むしろ忠(息子：仮名)のおかげで関係はより良くなりました。

**D**：でも、今は息子さんとの関係は自然消滅してしまったんですね。

**千佳子**：そうになってしまうんですかね。

私はまたいつか近々あるかと思いつているんですけども。

**D**：その辺りを全て含めまして改めて以前より詳細にお伺い致します。

まず、ご年齢と職業など簡単な自己紹介をお願いします。

**千佳子**：またそこから入るんですね。分かりました(笑)

名前は千代子(仮名)年齢は現在 ■1 歳。職業は専業主婦です。息子と関係したのは、3 年前、その時私は ■8 歳で、息子の忠は(自主規制)でした。

## 体験告白パート：息子の性への目覚め

仕事に熱中していた私が結婚したのは結婚適齢期ギリギリでした。  
相手は 20 歳近く年上の取引先の社長。それが今の主人です。  
結婚した理由はできちゃったから…。結婚も子供も諦めていた私には朗報でした。  
結婚後は主人が裕福だったという事もあり仕事を辞めて専業主婦になりました。  
専業主婦としての生活は幸せでしたが、主人は出張も多く、  
帰ってくる時間帯も深夜になる事が多いです。  
更に年齢と先天的なものの影響で若干あっちも…  
というのが新婚当初からの状況でした。  
勿論、昔も今もずっと主人を愛していますが、  
当時はその事に少し淋しさを感じていました。  
その反動もあったと思いますが私は息子に沢山の愛情を注いできました。  
ただ、今思えば甘やかし過ぎていたんだと思います……。

息子はとても甘えん坊で小さい頃から私が布団の中で寝ていると、  
甘えて私の布団の中に入って来て私の胸を揉んだり吸ったり舐めたりしていました。

——もう、いつまでも子供で甘えん坊なんだから。

とその程度にしか思いませんでした。

異変に気付いたのは〇年生の終わりごろです。

いつもの様に私の布団の中に入って来てパジャマのボタンをとって、  
息子は私の胸を舐め始めました。

チューツチューツチューツ

チュパッチュパッチュパッ

ペロペロペロペロペロペロ

私は眠たかったものでウトウトしながらそれを身体に受け入れていました。  
その時です！

私の膝元に何か固くて熱を帯びている物が当たっている事に気がきました

…これはもしかしてと思い私は恐る恐る薄目を開けました。

無我夢中で私の胸を揉んで吸って舐める息子。

その表情は小さい頃から知っている、甘えておっぱいを欲しが  
る無邪気な子供ではありませんでした。明らかに性的に興奮している顔です。

更にパジャマとパンツ越しにおちんちんを私の身体に密着させて擦りつけてきています。

私はどうして良いのか分からず目を閉じて眠っているフリをしました。  
舐める、吸う、揉む、擦りつける…忠が行うその動きはどんどん早くなっていきました。

—今日が初めてなの？

—それとも気付かなかっただけで今までもこんな風だったの？

「んッ」

息子はそう小さな声で言葉にならない言葉を叫びました。

身体を密着させているのでそれを叫んだのと同時に、

息子がビクビクッと身体を振るわせているという事が振動で、  
私の身体に伝わってきました。

—う、嘘、逝ったの!?!この子いつの間にこんな…

「ん、ん、チュパッチュパ」

逝った後もその余韻を楽しみたいのでしょうか…私の胸を息子はまだ舐めています。

おちんちんもまだ私の身体に擦りつけています。

速度は先ほどに比べればとてもゆっくりです。でもどこか丹念で濃密にも感じました。

しばらくそれを行った後、息子は満足した様で自分の寝室に戻っていきました。

—どうしよう？

私の頭の中は今までないくらい混乱しました。

そして、それだけでは終わりませんでした。

息子はそれから毎日私の胸を吸いにくるようになりました。

そして同じ事を繰り返して自分の寝室に帰って行きます。

胸を吸うこと事態は今までも当たり前に行っていた事ではありました。

ただ、こんなに頻度が激しかった事は○学校入学以降はありませんでした。

私を明らかに性の対象として認識している事にも、

毎日混乱して頭がパニックになりました。

そして、私はどうして良いのか分からずそれを身体に受け入れ続けていました。